



綿向山南麓の標高約430mに位置する熊野地区では、山間の斜面に未整備の水田が並ぶ。小さな農地には大型の機械が使えないため農作業にかかる労力は大きく、獣害も多い。こうした厳しい営農条件に加えて、元々農地の面積が少ない熊野地区では、農業による収益が得られないことなどを理由に近年農業をやめる住民も出てきており、耕作放棄地の増加が懸念されていた。

■半信半疑で始まった棚田ボランティア

熊野では、県（農村振興課）による棚田ボランティア活動の候補地調査の後、県から棚田ボランティアによる棚田保全活動を始めてみないかと声がかかった。当初は「誰が他人の農地の草刈りに来るのか」と住民たちは半信半疑で、集落内でなかなか話が進まなかった。

結局自治会として取り組むことはできなかったが、熊野にあるキャンプ場「グリーン冒険の森」を運営する「熊野ワークス企業組合」の組合員が中心となり、平成20年度から棚田ボランティアの募集を開始。そして棚田ボランティア活動による棚田の保全や都市住民との交流を進めて行くため、本事業に取り組むこととなった。

■作業は田植えから収穫まで

21～23年度、熊野では年に6～7回棚田ボランティアを募集し活動した。水路、耕作道の補修や草刈りだけでなく、田植えや収穫作業にもボランティアを募集する。通年のボランティア活動により、農業の苦勞だけでなく、農業のやりがいや面白さも味わえるのが魅力だ。また、活動後には地域のご婦人が手作りの昼食を振る舞う。作業後に味わえる手料理は参加者から大好評だ。地域の取組にはこのような女性の協力が大きな力になる。



ボランティアによる田植え作業

棚田ボランティア活動を通して、熊野に住む住人の人柄の良さやのどかな環境に触れ、「熊野が好きになった」という常連さんもある。地

地域の声

【写真左から】(H24区長) 福井敬一さん・(地元農家) 橋本哲一さん・(熊野ワークス企業組合事務局) 坂 久典さん



- 棚田ボランティアで本当に人が集まるのか半信半疑で、集落内でなかなか話が進みませんでした。
- ボランティアの方にも作物が育つところまで携わってもらえるよう、田植えから収穫までボランティアを募集しています。

◆活動で工夫したこと

- ・ 田植えや収穫作業にもボランティアを募集した。

◆地域活性化のキープポイント

- ・ 活動を引っ張るリーダーの存在。
- ・ 資金面での計画をしっかりと立てる。

◆今後の展望

- ・ 「熊野の棚田米」を近隣レストラン等で使ってもらいたい。
- ・ 棚田米の販売先の開拓、ブランド化。

●活動組織問い合わせ先

熊野ワークス企業組合
☎ 0748-53-0809

Memo
熊野(くまの)
【戸数】15戸
【人口】39人
【高齢化率】43.6%

出典：H22 国勢調査

👁️ 事業で取り組んだ活動

✓ 棚田ボランティア (平成23年度実績)

- 4月 2日 休耕田の水利確保(水路・耕作道の補修)と草刈り
- 5月15日 田植え、獣害防止柵設置
- 6月 4日 畦、休耕田等の草刈り
- 7月31日 畦、休耕田等の草刈り
- 8月28日 畦、休耕田等の草刈り
- 10月 1日 稲刈り
- 11月12日 獣害防止策撤去、
収穫祭(餅つき、注連縄づくり、農産物の直売等)

■資金不足が大きな悩み

事業は23年度で終了し、現在は活動に係る資金不足に頭を悩ませている。また集落内で棚田ボランティアに関する意見は様々であり、今なお活動に否定的な人もいる。ゆくゆくは集落全体で取り組むたいと考えているが、今はまだ「熊野ワークス企業組合」が主体となり、棚田ボランティア活動に賛同する住民とで活動を進めている状態だ。

域住民と個人的な付き合いを始め、ボランティアという範囲を超えて、地域の荒れた田を耕作する人もいる。このように、活動を通して地域住民と都市住民のつながりが生まれつつある。また、「棚田＝熊野」というイメージが浸透し、集落の名前が売れたことも活動の成果である。



作業後の昼食(交流会)

過疎高齢化が進む中、取組を進める上での課題は多いが、収穫量の少ない熊野の米に「希少価値」を生み出し、「グリーン冒険の森」にてブランド名『クマヒカリ』として販売していくと構想を描いている。



収穫作業

●日野町職員のコメント

山間部に位置し、年々農家が減少していく中で、この事業を通じての棚田保全活動により、地元住民とボランティアとして参加される都市住民との交流が深まりました。今後も、県、地元およびボランティアの方々と町との連携を図り、棚田保全活動を通じて集落の活性化の取組が継続されることを期待します。

《問い合わせ先》 日野町農林課 ☎ 0748-52-6563



事業で取り組んだ活動

- ✓ **田舎暮らし体験ツアー**
…田舎暮らしをテーマに都市住民との交流を図り、奥永源寺の魅力を発信する「田舎暮らし体験ツアー」を開催。
- ✓ **道の駅を核とした地域振興**
…地域振興の核としての道の駅のあり方について先進地視察や協議を重ね、道の駅構想に関する提案書を市に提出。
- ✓ **物産展「奥永源寺溪谷の里まつり」**
…道の駅での「売れるもの探し」を兼ねて、物産販売イベント「奥永源寺溪谷の里まつり」を開催。
- ✓ **ムラサキの試験栽培と商品化の検討**
…希少な染色植物である市の花ムラサキの試験栽培の実施と、地域資源としての活用方法の検討。

永源寺東部地区（奥永源寺地域）は、鈴鹿の山々に囲まれた7つの集落（夢畑・杉畑・萩葉尾・黄和・政所・箕川・蛭谷・君ヶ畑）からなる山村地域である。過疎化や高齢化の進行によって伝統文化の継承だけでなく、集落活動の維持も危ぶまれており、7集落のうち4集落で高齢化率が50%を超えている。

そんな中、7集落が協力して継続的な地域振興に取り組むために、各自治会長の推薦を受けた15名のメンバーで構成される奥永源寺振興協議会（以下、協議会という）が設立された。そして協議会が発足して間もなく、市役所からの提案がきっかけとなって本事業に取り組みることとなった。

本事業では協議会が主体となり、都市との交流を図る「田舎暮らし体験ツアー」や、道の駅構想の協議、市の花ムラサキの栽培実験などが行われた。

■体験ツアーで奥永源寺の魅力発信

豊富な自然を売りに、田舎暮らしをテーマとした一泊二日の体験ツアーが開催された。のかな農村で宿泊し、田舎暮らしを体験する中で、

住民との交流だけでなく、木地師体験や椎茸の菌打ち体験など奥永源寺らしい体験ができることがこのツアーの魅力だ。

このツアーに参加して奥永源寺の魅力に気づき、移住してきた例がすでに6件ある。それだけではなく、「ここがいい」と奥永源寺の魅力を口にしてくれる人の存在により、住民も地域に自信が持てるようになった。



椎茸の植菌を体験するツアー参加者

■地域のPR拠点となる「道の駅構想」

国道421号石樽トンネルの開通に伴い、地域活性化のために道の駅の設置が計画されている。協議会では、道の駅を核とした地域振興のあり方について先進地視察や協議を重ねられた。

また、道の駅構想を機に、地域の「売れるもの探し」を兼ねて、



奥永源寺溪谷の里まつりの様子

物産販売イベント「奥永源寺溪谷の里まつり」が開催された。当日は地域の女性グループが創作菓子や工芸品を販売するなど、多くの出店者が集い、大いに盛り上がった。

多くの人が訪れる道の駅に、ボランティアガイドを設置し、奥永源寺の歴史や文化などのPR拠点とすることも検討されている。

■共同意識の必要性

協議会は住民に活動への参加の強制や押し付けをせず、あくまで住民自身の「積極性」を重んじている。これは、住民自身が地域振興を自分の問題と捉えなければ、事業の成功は難しいと考えたからだ。このように、住民自身が地域の課題を認識し、事業に取り組んだこと、そして一つの集落で問題を解決しようとするのではなく、奥永源寺という地域で取り組んだこ



ムラサキの根（左）とその染物（右）

とが、地域振興のキーポイントである。

●索近江市職員コメント

奥永源寺地域では、奥永源寺振興協議会を中心に、地域の振興に主体的に取り組んでいただいております。地域振興のためには、地域の方々の力が必要不可欠であり、今後とも、地域における主体的な取り組みに期待しております。また、奥永源寺地域には道の駅の設置を計画しており、地域の方の意見もいただきながら、地域振興の核となるよう取り組んでまいります。

《問い合わせ先》 東近江市企画課 ☎ 0748-24-5610

地域の声

【写真左から】奥永源寺振興協議会（部長）河島邦夫さん・（会長）川上喜久雄さん・（副会長）山口豪さん



- 「田舎暮らし体験ツアー」が、地域への移住促進につながりました。
- 都市住民が奥永源寺の魅力を口にしてくれるため、住民も地域に自信が持てるようになりました。

◆活動で工夫したこと

- ・ 地域にあるものを大切にしつつ新しいことにも取り組んだ。
- ・ 活動への参加を住民に強制せず、住民自身の「積極性」を重んじた。

◆地域活性化のキーポイント

- ・ 住民の積極性を尊重する。
- ・ 一つの集落ではなく、地域で一体となって地域振興に取り組む。

◆今後の展望

- ・ 田舎暮らし体験ツアーを継続し、移住のきっかけをつくりたい。
- ・ 奥永源寺のガイドの養成と、特産品の開発。

Memo

夢畑（たてはた）	【戸数】 13戸
	【人口】 28人
	【高齢化率】 46.4%
萩葉尾（ゆずりお）	【戸数】 52戸
	【人口】 140人
	【高齢化率】 40.7%
黄和（きわだ）	【戸数】 23戸
	【人口】 73人
	【高齢化率】 41.1%
政所（きんどころ）	【戸数】 52戸
	【人口】 109人
	【高齢化率】 54.1%
箕川（みのがわ）	【戸数】 7戸
蛭谷（ひるたに）	【戸数】 14戸
	【人口】 35人
	【高齢化率】 51.4%
君ヶ畑（きみがはた）	【戸数】 21戸
	【人口】 37人
	【高齢化率】 73.0%

※合算



琵琶湖を望む急傾斜の斜面に棚田が広がる八王寺地区では、農業者の高齢化や農作業の効率の悪さから、耕作放棄地が増加しており、さらに若い世代の集落外への流出が懸念されていた。

このような地域を抱える現状に危機感を抱いた地域活動組織「仰木自然文化庭園構想八王寺組」が、地域の活性化に向けてふるさと農村支援事業に取り組んだ。

■仰木の棚田で都市住民と交流

八王寺組は、農業組合のOBを中心とした有志11名により平成18年に結成された、自治会とは切り離された活動組織だ。

地域には「琵琶湖を望む絶景の棚田」や、「仰木の棚田で育ったおいしいお米」といった魅力がある。八王寺組は、そんな地域の魅力に気付くことなく若い世代



仰木の棚田

が集落から出て行ってしまふことのないよう、『地域の魅力を再発見』するための活動として棚田ボランティアや棚田オーナー制度による地域の棚田保全活動に取り組んだ。

棚田ボランティアでは、耕作道の整備や休耕田の草刈りといった農家にとってつらい作業内容が多いが、集落外から毎回10名前後の参加があった。

棚田オーナー制度は、年会費として一区画（10a）につき3万円を徴収する。オーナーになると田起こしから収穫まで一連の作業を体験でき、最後に棚田でとれたお米30kgをもらうことができる。

両活動ともに多くの都市住民の参加があり、地域住民と都市住民の交流が図られたほか、普段農作業に携わることのない一部のスタッフにとっても農業を学ぶ良い機会となった。



獣害防止柵の設置

地域の声

八王寺組事務局 上坂宗万さん



- 棚田ボランティア等の活動により棚田保全や都市住民との交流が図られました。
- 活動を続けてきて、徐々に集落内で八王寺組の取組が認知されてきていると感じます。

◆活動で工夫したこと

- 八王寺組は集落内のごく一部のメンバーで構成される組織であるため、自治会や農業組合に対し、取組の計画や実績を報告するほか、集落内で活動に関するチラシを配布するなど、地域住民に活動を理解してもらえるよう努めた。

◆地域活性化のキーポイント

- 地域の魅力を“作り出す”のではなく、あるものを“再発見”する。

◆今後の展望

- 地元産農産物の価値を高めたい。

●活動組織問い合わせ先

八王寺組
✉ hachiojigumi@gmail.com

Memo
仰木（おおぎ）二丁目
【戸数】275戸
【人口】958人
【高齢化率】29.2%

事業で取り組んだ活動

- ✓ **棚田ボランティア**
…集落外からボランティアを募集し、耕作道の整備や休耕田の草刈り、獣害防止柵の設置などの作業を実施。
- ✓ **棚田オーナー制度**
…年会費として一区画（10a）につき3万円を徴収。オーナーは田起こしから収穫まで一連の作業を体験できるほか、お米30kgをもらうことができる。
- ✓ **広場にトイレを設置**
…都市住民との交流拠点を整備するため、広場にトイレを設置。

■外部の力で活動を推進

現在、近隣の成安造形大学が講義のフィールド

イア、棚田オーナーと共に継続されている。さらに24年度からは、「棚田ボランティア活動により復田した田んぼ」でも新たに棚田オーナー制度を開始した。また、活動拠点となる広場に農機具小屋として使用するストローペイルハウス（藁の家）の建設にも取り組んでいる。

■地元産農産物の価値を高めたい
田んぼを守るには農業を続ける必要がある。そのためには、「農業が続けられるよう米を高く売りたい」という思いが八王寺組にはある。将来的には地元産農産物の価値を高め、地元農家が農業で生活できるようにしたいという思いを抱いて日々の活動に取り組んでいる。



オーナー田の収穫

ドとして仰木の棚田で活動しており、学生がストローペイルハウスの建設作業に参加するなど、八王寺組の活動にも携わっている。このように、スタッフの数は11人と少ないが、都市住民や学生といった外部の力を加えて活動を進める八王寺組。今後は地域の若い世代をいかにして活動に取り込むかが課題となっている。

●大津市職員コメント

八王寺組は、若手の地域農業組合役員らが奮起され立ち上がった、活力と企画力が際立つ組織です。先輩役員の指導とアドバイスが上手く連携し、集落内の上下関係や近隣の大学、ボランティアなどの多様な組織を取り込んだ、若手ならではの今後の期待される組織です。

《問い合わせ先》 大津市田園づくり振興課 ☎ 077-528-2758



琵琶湖の西岸、比叡山の裾野に農地が広がる安養寺地区。都市部へのアクセスは悪くないが、より利便性の良い近隣の住宅地などに移り住む人が多く、徐々に空き家が目立ち始めていた。そこで地域では、ほ場整備事業を契機に、新たに生み出された畑地を活用して貸農園「上仰木タナバタふれあい園」を開園した。運営するのは地元農業者が組織する「上仰木タナバタ園管理組合」だ。貸農園を始めた背景には「優良な農地を将来に引き継ぐとともに、都市住民とのふれあいの場にした」という地域住民の思いがあった。

貸農園は一区画15㎡（3m×5m）で、料金は一区画あたり年間3000円。ここ数年は全体（約800区画）の半分ほどが埋まるが、利用者数は頭打ち傾向にあった。そこで、貸農園の有効活用と、都市住民との交流による地域の活性化を図るため本事業に取り組むこととなった。



上仰木タナバタふれあい園

■「赤そば」栽培に挑戦
本事業では、貸農園の空き区画を利用し、観作物として赤そばの栽培に挑戦。初年度の22年度は、一部で綺麗な花が咲いた。さらなる飛躍を誓った23年度は赤そばの栽培に詳しい信州大学の教授から指導を受けるなど、その成長を大いに期待したが、生育不足により満足な結果を得ることはできなかった。それでも、計画していた都市住民との交流イベント「そばの鑑賞会」を開催。メインのそば鑑賞やそば打ち体験はできなかったが、当日は約70名の参加があり、餅つき体験や、地元の特産物である「納豆餅」、獣害駆除した猪肉の試食などを通して、農園利用者同士や地域住民との交流が図られた。

さらには「仰木の棚田米」を始めとする地元産農産物の特売を行うことで、地域のPRならびに農家の収益確保にも寄与するイベントとなった。



そばの鑑賞会

地域の声

仰木学区自治会連合会（副会長）市田太平次さん



- 貸農園は、都市住民等外部の人に地域に定期的に足を運んでもらえるため、地域や地元産農産物（「仰木の棚田米」）のPRに繋がっています。
- もっと多くの人に貸農園を利用してほしい、仰木の良いところを知ってもらいたいです。

●地域活性化のキーポイント

- ・ 都市住民など地域外の人に地域へ足を運んでもらう。

●今後の展望

- ・ 広報活動に力を入れ、貸農園の利用者を増やし、さらに地域をPRしたい。

●活動組織問い合わせ先

上仰木タナバタ園管理組合（担当）市田太平次
☎ 077-572-1864

Memo
仰木（おおぎ）二丁目
【戸数】275戸
【人口】958人
【高齢化率】29.2%

出典：H22 国勢調査

事業で取り組んだ活動

- ✓ **赤そば・白そば栽培**
…貸農園の空き区画を利用し、赤そば・白そばの栽培を実施。赤そば栽培には非常に苦勞し、大学教授から指導を受けるなど試行錯誤しながら取り組んだ。
- ✓ **獣害防止柵の設置**
…貸農園の周りに獣害防止柵を設置した。
- ✓ **そばの鑑賞会(交流会)**
…農園利用者同士や、地域住民との交流会を開催。棚田米や猪肉、地元の特産品「納豆餅」の試食、餅つき等を実施したほか、棚田米を始めとする地元産農産物の特売を行った。

■過疎高齢化に歯止めをかけた
赤そばや都市住民との交流イベントにより



満開の赤そば

■2年間の取り組み
2年間取り組んだ赤そばは、ともに満足な結果が得られなかったが、「何とか成功させたい」と臨んだ24年度、ついに貸農園に満開の赤そばが咲き誇った。地域の魅力である琵琶湖を望む美しい眺めに赤そばが加わり、農園利用者や地域住民を大いに楽しませた。



棚田米の特売

地域に人を呼び込み、地域の魅力や地元産農産物をPRするとともに、「いずれは地域の過疎高齢化に歯止めをかけた」と、貸農園を核とする取組に希望を抱く。多くの都市住民が定期的に地域に足を運ぶ貸農園は地域活性化への大きな可能性を秘めている。管理組合では「貸農園の利用者をもっと増やしたい」と貸農園や地域のイベントの広報活動を模索中だ。

●大津市職員のコメント

ほ場整備事業を契機に貸農園として農地を開放し、貸農園を訪れる近隣の新興住民や都市住民に集落の特産などのPRや交流を企画される発想に成果がありました。都市化が進む同様の地域にも参考になると思いますので、一度来て頂ければと思います。

《問い合わせ先》 大津市田園づくり振興課 ☎ 077-528-2758